

映画『何者』にみる若者ことばの「中性化」

小林 美恵子

要 旨

女性文末助詞「わ」「かしら」不使用など、日本語の中性化がいわれているが、作家性が反映するTVドラマや映画では、自然談話よりも女性・男性形式の使用が残っているという。しかしこれらの分野でも、現実の影響を受けた作家性の変化や、観客に受容されるリアリティから、通時的にみれば中性化は進んでいる。

映画『何者』の文末形式や、丁寧体の使用、若者ことばなども中性化している。一方、一部の男性文末助詞や「すげー」「ねー」などの音変化、人の呼び方などについては、男女差があいかわらず残っているが、それらは自然談話の状況とほぼ一致し、実際の話しことばを反映しているといえる。

キーワード：映画『何者』、中性化、若者ことば、文末形式、『談話資料 日常生活のことば』

1. はじめに一自然談話の「中性化」とTVドラマのことば

現代の日本語において、女性だけが使うとされた文末助詞「わ」「かしら」などが使われなくなり（脱女性化）、かわりに「だ」「かな」などが男女ともに使われるようになった、という意味での「中性化」は、すでにさまざまな調査によっていわれている。今年40号を迎えた『ことば』誌上でも、80年代から、このような現象に関する報告が、小説、マンガ、座談、インタビュー、TVドラマ、映画などさまざまな資料によっておこなわれてきた。自然談話を記述した共同研究、現代日本語研究会編（1997・2002（2011））、遠藤他編（2016）のデータによっても、「わ」の不使用、「だ」の使用が一般化していることが尾崎（1997）、増田（2016）によって報告されている。

これに対して、水本（2005、2006）や水本他（2006）、水本他（2008）の一連の研究では、当時のTVドラマの10～30代の女性のことばを分析し、「わ」「かしら」などの使用が不使用に比べ圧倒的に多いとした。また、ドラ

マでは、これらは主張・反論、抗議や皮肉・嫌味など相手と対立する感情が表出する発話で用いられる傾向があるが、自然談話コーパスにはそのような例は現れないので、これは現実を反映したというより、脚本家のキャラクター認識やジェンダー意識と結びついたものであるとする。とはいえ、現実の変化は脚本家の意識にも影響を与え、トレンドドラマの領域では女性文末詞使用が衰退傾向もみせており、その演出効果も脚本家のジェンダー意識や時代に合う女性像を反映して、徐々に変化していくともいう。

自然談話コーパスに現れないから現実に使われないと断じることには疑問があるが、現実によって脚本家の意識が変化し、ドラマのこともば変化するのとは確かである。15年後の現在、TVドラマで等身大に描かれた2、30代の女性が「わ」「かしら」を使う場面は、すでにほとんどみられなくなっている。

2. 映画のこともばを言語資料とすることについて

映画の場合も同じようなことがいえる。小林（2010）では、1960年代～2010年制作の現代映画30本に現れる夫婦のこともばを調べた。それによれば、妻から夫に対することもばは、初期の丁寧体や敬語使用から、非丁寧形・女性文末形式使用へと変化し、2000年代に入ると「だよ」「かな」などの中性的な文末形式が普通に使われるようになっていく。

初期にも非丁寧形・「だよ」「かな / かね / かい」などを使う妻はいたが、職人などの階層や、少し変わった性格設定がされている女性に限られていた。しかし、2000年代の「だよ」「かな」や非丁寧形言い切りは都市在住の一般的な若年・中年の妻に普通に用いられている。それは50年間の夫婦のありようの変化や、女性のこともばの変化の結果だといえそうだ。

映画のこともばは、TVドラマと同じく現実そのものではない。大量に作られ茶の間で消費されるTVドラマと比べても、より作家性が色濃くともいえる。つまり作家—脚本家のジェンダー認識やキャラクター意識が色濃く反映する可能性はある。しかし一方で劇場映画は観客の支持なしには成り立たない芸術分野でもある。特異な作家性が喜ばれる映画は存在するし、言語的なリアリティなどはもともと期待されない（むしろ決まった役割語の様式が

用いられる)時代劇やファンタジーのようなジャンルもあるが、現代の日常生活を題材に等身大の人物を描くというようなジャンルでは、作家や演者が創出するにしても、観客にも受け入れられるようなリアリティ抜きには作品は成り立たない。その意味で、映画(現代劇)やTVドラマ(トレンディドラマ)に現実のことは反映を求めるのは不可能ではない。また、観客が映画やドラマを通して得たことばや言い方を意識的、無意識的にまねて再生産していくという可能性もある。これらがことばの変化の1つの指針となる可能性もある。その意味でも映画やドラマのことは談話分析の題材とすることは決して意味のないことではないと思われる。

映画のことは作者や演者の意識のフィルタを通したものであり、その意識は作品によっても違う—より色濃くたとえば作家のジェンダーフィルターが影響している作品も、そうでないものもある—という点からの作品ごとの見極めは必要であるが、その上で映画やTVドラマなどのセリフを用いて現実の言語のありようを探っていくことは、決して不可能ではない。

3. 映画にみる「わ」、「だ」の不使用、「かしら」

4節以後、映画『何者』(2016三浦)における現代の若年層のことは中性化の様相をみていく。それに先立ち、なぜこの映画なのかを明らかにするために、ここ10年ほどに作られた3本の映画での、2、30代の女性たちを中心に、「わ」や「かしら」の特徴的な使用状況を見てみよう。これらは、概ね水本他(2006)のあげたTVドラマの状況と近いのではないと思われる。

『ハッピーフライト』(矢口2008)は、ある航空会社で、ハワイ行きの航空機がバードストライクにより損傷し、羽田に戻ることになるが、その帰途台風に遭遇する。パニック後の無事着陸という1日をさまざまな職種の目を通して描いた作品で、ほぼ職場での仕事に関する会話のみで構成されている。

登場する20代女性は新米客室乗務員悦子とその同僚たち、グランドスタッフの先輩・後輩の^{なつみ}菜採と美樹だが、どの女性も(男性も)上司や先輩と話す時には丁寧体を使い、もちろん「わ」も「かしら」も現れない。

冒頭に客室乗務員たちが出勤するバス車内で雑談するシーンがある。

「あーあ、なんか気持ち悪くなってきた」「大丈夫?」「今まではたいてい1、2時間だったじゃん? どんないやなお客でもすぐお別れできたけど、今度国際線だもん。機内食とか、免税品とか、絶対なんか失敗する」「グアム便で、何そんなこと言ってるの? わたしなんかホノルルなんだからね」と、普通体のくだけた会話だが「わ」も「かしら」も使われていない。

グランドスタッフのほうは、後輩美樹はくだけた内容の会話であっても先輩には丁寧体をくずさないが、それほど年の差があるようにはみえない先輩菜採は出会いのない仕事をやめたいと言い、「出会いありますよ、きっとー。芸能人とかしょっちゅう来るじゃないですか。やめたら生^{なま}で見れなくなっちゃいますよー」という美樹に「あんたいいわねえ、得な性格で」と「わ」を使っている。ただし、菜採の「わ」はこれ1例だけで、「わたし、もう体力に自信ない」のように普通体言い切りや「やりゃできんじゃないの」「こういうときどうするの?」「行ってきたさい」のような先輩としての評価・詰問・命令の「の(?)」や「なさい」などが目立ち、「かしら」は現れない。なお、30代と思われるチーフ乗務員の山崎も部下に対する普通体の発話では「の?」や「なさい」が多いが、機内食を配る悦子に対して「バランスよく配りなさい。食べ物で恨まれたら、後々きつくなるわよ」と1例だけ「わ」を使っている。悦子自身も、客室乗務員を志望する高校生の乗客に対して「厳しいわよー」と笑って言っており、「わ」の使用が、年長者から年下の者に何かを教えたり、感情をあらわすような場面で起こっていると察せられる。

『海街ダイアリー』（是枝2016）は鎌倉に住む20代の3人姉妹のもとに、共通する父を亡くした中学生の異母妹がやってきて一緒に住むという話。しっかり者で、両親のいない家で看護師をしながら妹たちの面倒をみてきた長女幸^{さち}は妹たちに「(てんぶらにする)ナス、あるわよ」「もう妹なんだから「ちゃん」はつけないわよ」「あんたに言われたくないわよ」、大叔母には「わかってるわよ、おばさん」、職場の同僚に「もう、笑い事じゃないわよ」、久しぶりに会った母に「ちょっと待って、あたしも行くわ、お墓」、恋人に「わたし、そろそろ帰るわ」のように「わ」をよく使っている。ただし、「かしら」は現れないし、末妹すずに「玉ねぎ、それくらいでいいよ」「ごめんね。

わたしたちがすすを傷つけちゃったんだね。」「誰のせいでもないんだよ」、恋人に「あたし、多分人のためなところばかり気になっちゃうんだよね」というように「わ」の不^{よしの}使用形や「だ」の使用形もよく使う。

地方銀行に勤める次女佳乃は活発で自由な性格で、姉に対しては対抗意識をもっているようなところがある。彼女も家族に対しては基本的に普通体使用で、「わ」については、男性とのつきあいを姉に批判され「お姉ちゃんにはわかんないわよ」と反発する1例のみがみられる。三女の千佳はスポーツ用品店に勤め、釣りが趣味。協調的な性格で姉たちの仲裁をしたり新来の妹の面倒をよくみる。彼女には「わ」「かしら」などは1例も現れず、常に普通体言い切りや「だ」使用形文末である。末妹のすすは、この家に来た当初は姉たちに丁寧体で話すが、打ち解けた後は普通体言い切りや、それに終助詞「よ」「ね」などをつけた形に変わる。「わ」「かしら」はみられない。この映画にはほかに年長者である大叔母や、姉妹の母などが出てくるが、どちらも「わ」使用「だ」不使用形基調で話し、「かしら」の使用もみられる。

この映画の「わ」使用を決めているのは長女の場合も含め、話者の年代である。次女の場合は、先にTVドラマの分析で指摘されていた「主張・反論、抗議や皮肉・嫌味」（この場合は抗議）に当たるといえよう。長女にも抗議や反論があるが、もう少し広く、軽い主張などの際にも用いられているようだ。

『家族はつらいよ』（山田2016）は1世代2世代とも専業主婦という3世代同居家族の物語。70代の妻、40代の長男の妻、40代の別居の娘、近くの居酒屋の中年の女主人は「わ」「かしら」使用「だ」不使用者として描かれる。

30代の末息子庄太の婚約者で看護師の憲子は、職場での打ち合わせや庄太の家族と話す場面などでは丁寧体を使用、「わ」「かしら」などはもちろん現れない。庄太と電話で話す場面では、庄太「今どうしてるの？」憲子「夜勤明けでこれから帰って寝るんだけど」庄太「今日は日野の市民ホールで仕事なんだ。憲子さんの家に近いからお昼頃来てくれないかな。相談があるんだ」憲子「いいよ。お弁当作っていったらあげようか」と、憲子は「わ」も「かしら」も使わない。だが、その後庄太と会い、プロポーズされる前段では「お弁当、作ってきたわよ」と1例だが「わ」が出現する。その後の2人の会話

も、庄太「親父と兄貴は仲が悪いだろ？僕がいないと家がバラバラになってしまうんだ。兄嫁も気が強いしね」憲子「じゃあ、庄太さんは緩衝材なのね？」庄太「接着剤かな（笑）」憲子「でも、大丈夫なの？庄太さんが家を出ても」庄太「今まで何とかやって来たんだから、もう大丈夫だろう。親父も年だし」と、ともに穏やかな語り口だが、文末形式には明らかな男女差がある。このような2人の話し方が2、30代の男女として、現実をどの程度反映しているのかは疑問である。映画製作時点で80代半ば過ぎだった監督・山田洋次の言語意識の反映というべきかもしれない。

以上の3本からは、近年の映画でも2、30代の女性が「わ」を使う例があること（「かしら」のほうはほぼ消えたといってよいだろう）、それらが、それぞれ相手や場面の設定、話者の年齢・性格、作者の意識の反映などによるものでありそうだということがわかる。

4. エポック的作品としての映画『何者』

特定の映画に現実のことが反映しているとみるには限界があるとしつつ、『何者』をとりあげるのは、日本語の中性化の流れの中で、女性文末形式「わ」「かしら」などが、どの女性登場人物にも1度も使われないという意味において、エポックを画する作品の1つといってもよいと思われるからである。

『何者』は朝井（2012）の同名小説が原作で、ある大学に在籍して5年目の5人の男女の就活の様相と意識や行動を描いている。主人公二宮拓人がツイッター上で語るモノローグで進行し、他の登場人物はいわば彼の遭遇した場面での会話を、彼によって記録されているという描き方である。原作小説と比べると、説明的なセリフなどは大幅に省かれる一方、文末形式や話体などの部分については原作の口調を生かしたセリフ設定もされているようだ。

主人公・拓人は演劇活動に熱中していたが、4年生での就職活動に失敗、卒業せず2年目の就活をしているもののなかなか思うようにいかない。彼とルームシェアをしている神谷光太郎はバンド活動に夢中になり留年、5年生になってバンドを引退し就活を始める。要領も調子もいい男で、第1志望ではないが、まあまあの出版社に就職を決める。

彼らの社会学部の同級生が田名部^{みづき}瑞月で、1年間の留学を経て帰国後大学5年目にして就活にとりくんでいる。彼女は家庭事情を抱え堅実な職種に志望変更をする。その留学時代の知り合いが同じ大学の国際文化学部の小早川理香。彼女はボーイフレンドの宮本隆良とともに、偶然拓人・光太郎の住むマンションに住んでおり、瑞月を介して2人とも知り合いになる。就職に関する意識が高く、情報集めに熱心でOB訪問なども積極的に行うが、なかなか内定にこぎつけられない。同居する隆良は、自分は就活や会社という組織には向かないと公言し、アート系のフリーランサーを目指すが、うまくいかず、やがて本格的に就活を始めることになる。

この5人のほかに比較的まとまった量のセリフ（会話のやり取り）がある登場人物は、拓人の演劇部時代の先輩で、現在も同じカフェで一緒にバイトする理系の大学院生沢渡、そしてやはり同じカフェでバイトをする同じ大学の後輩の女子学生（名前はつけられていない）である。

同学年の5人は、もちろんそれぞれに個性や考え方などには違いがあるが、同じ大学の学生、同じように就職活動中、そして5人中4人までが同じマンションに住んでいるということで、社会的にみれば、かなり似通った境遇・立場にあるといってよい。彼らは初対面では丁寧体を使用し挨拶語なども頻繁に出てくるのだが、親しくなると打ち解けて遠慮のない会話をする。先輩沢渡、後輩女子学生の2人も、同じ大学の学生で、20～25歳くらいの者たちであるという点で、共通の文化圏・生活圏に属しているといってよいだろう。

なお、7人の発話を、話者交代および、1人の発話が長く続く場合には文ごとに区切ったもので発話量をみると、光太郎245発話、拓人194発話、理香139発話、瑞月119発話、隆良56発話、沢渡43発話、後輩女子学生20発話で、彼らのうち複数の者が声をそろえ、もしくは口々に同時発話したものが6、登場人物の問いかけなどに上記以外の誰かが答えたものが2の、合計824発話（男性538、女性278、その他8）であった。以下数字をあげた部分についてはこれらの発話中の数値ということになる。なお、拓人のモノローグの発話、就職面接や劇団員の演じる演劇シーン、映画終盤に拓人が回想し繰り返される劇中の会話のセリフなどについては検討の対象に含めていない。

分析にあたり、実際の自然談話との比較として、遠藤他編（2016）のデータを、以下『日常』と称して適宜参照することとする。

5. 『何者』の文末形式

5.1 女性専用とされた文末助詞

日本語において従来女性がよく使うとされた文末形式は以下のように整理できる。[]内は例、(?)は疑問に使われることもあるという意味である。

- ・「わ」の使用 「[いくわ」「いくわよ」「いくわね(?)」「いくわよね(?)」]
- ・「だ」の不使用 「[そうよ」「そうね(?)」「そうよね(?)」]
- ・「(な)の」の使用 「[いくの(?)」「いくのよ」「いくのね(?)」
「そうなの(?)」「そうなのよ」「そうなのね(?)」]
- ・「かしら」の使用 「[いくかしら(?)」「いくかしらね(?)」
「そうかしら(?)」「そうかしらね(?)」]

これらは『何者』の登場人物のセリフにはどのように現れているだろうか。

5.1.1 「わ」の不使用

文末助詞「わ」については10例みられるが、話者はすべて男性（光太郎・拓人・隆良）であり、音声を確認してみると、すべて下降調のイントネーションで発話されている。「わよ」「わね」などは現れていない。つまり、いわゆる女性専用形式としての「わ」ではないということだ。

（1）いやー、すげー久しぶりだわ、黒髪にしたの。（光太郎）

（2）ちょっとたばこ買ってくるわ。（隆良）

上昇調・下降調を問わず、文末助詞「わ」を使わない場合、「久しぶりだ」「買ってくる」のような言い切り、もしくは「久しぶりだよ/な」「買ってくるよ」のように「(だ)よ/な」の形になると考えられる。『何者』にはこのような文末は108例（男性66例、男性全発話の12%、女性42例、女性全発話の15%）みられ、このような言い方が女性でも普通であるといえる。

5.1.2 「だ」の使用

「だ」の不使用は、名詞や形容動詞に後接する「よ」「ね」「よね」などの形で起こるが、『何者』では、これも男性に次の1例がみられるだけである。

(3) 【拓人に別の友人について問われ】 ああ、あの子ね。(隆良)

『何者』での、このような文型での「だね」「だよ」「だよね」は24例(男16女8)ある。他に「～だ」と言い切ったものが23例(男15、女8)あり、ここでも割合的には男女に出現の差はない。

5.1.3 「(な)の(よ)」と「んだ(よ/ね/よね)」

「の」は8例の使用がみられる。瑞月5例、理香1例、光太郎2例である。「のよ」は後述(5.1.5)の1例、「のね」「のよね」は現れない。

(4) 理香とは留学生の交流会で知り合ったの。(瑞月)

(5) いやいや、そんな英語ペラペラみたいなさ、強いカード持ってる人に言われたくないの。(光太郎)

「の」「のよ」「のね」「のよね」が現れる位置でよく用いられるのは「んだ」「んだよ」「んだね」「んだよね」だが、これらは53例(男25、女28)みられ、「の」よりはるかに多い。特に女性の場合全体の発話数に対する割合で考えると、男性よりもよくこの言い方をしていることになる。また、女性では「んだね」「んだよね」と最後に「ね」をつけた形がそれぞれ7例ずつ14例あり、これは男性の「んだよね」が2例だけなのに比べると圧倒的に多い。

ちなみに『日常』のデータでも「んだね」「んだよね」は、他者のことばを引用したものを除くと合計155例現れる。そのうち女性の使用例は94例、男性61例、使用者数でいうと女性は53人で20～30代が20人いるのに対し、男性は36人、20～30代は8人だけで、40代8人、50代も7人とむしろ年代が上がるほうが、使用者が増えている。どちらかというところ若年層の女性に「んだね」「んだよね」などが多いことは『何者』の結果とも一致している。

また、すでに小林(1995)でも女子高校生6人の休み時間の会話の分析によって、彼女たちが文末助詞「ね」の多用によって相手との共感的会話を行っていることを指摘した。当時の高校生世代は『日常』の調査時には概ね

30代に達し、「んだね」「んだよね」の使用を続けていたといえるだろう。

(6) わたし、総合職じゃなくてエリア職なんだよね。(瑞月)

(7) でも、やっぱり好きなんだね、拓人君、演劇？(理香)

(8) 俺は流されたくないんだよね、就活っていう見えない社会の流れ
みたいなものに。(隆良)

5.1.4 疑問をあらわす「の」

疑問形を作る「の？」も女性的表現とされるが、特に2、30代では男性も「のか？」「んだ？」よりは「の？」を使うと、尾崎(2004)が報告している。「の？」はすでに中性化しているといってもよいだろう。実際に、『何者』でも27例(男18、女9)の「(な)の？」がみられ、他の疑問形「じゃね？」「じゃない？」の短縮形(男2例)、「～か？」(男1例)、「(ん)だ？」(男2例)、「ですか？/っすか？」(男4例、女3例 後輩から先輩にのみ)に比べても、「の？」は、男女ともに最もよく使われているといえる。

(9) なんのサークル、入ったの？(光太郎)

(10) そういえば、お前さ、ギンジの劇団見に行ったことあんの？(沢渡)

5.1.5 女性文末助詞としての「の」の使用

この映画で特筆すべきと思われる「の」は、光太郎が、大学1年次に拓人にルームシェアを申し込んだときに発した次のような1例である。

(11) ねえ、アタシたちうまくいくと思うのよ。(光太郎)

同居の申し出に色よい返事をしない拓人に対して、光太郎は拓人の肩を抱き、甘えるように少しふざけた調子でこいう。「アタシ」という自称も含め、この「のよ」にはわざと女性的な表現をしておもねるような意図が働いているようだ。光太郎という青年(を通した作者)の女性や、そのことばに対する意識が表出しているのかもしれない。この映画のいわゆる女性的な文末助詞は、「の(?)」をのぞけばこれが唯一の例であるのが興味深い。

5.1.6 「かしら」の不使用―「かな」の使用

「かしら」は男女ともに1例も現れない。代わりに使われているのは「かな(あ)」(11例、男3、女8)である。

(12) 友達いねえのかな、あの人。(光太郎)

(13) わたし、もう、あの部屋いけないかなあ。(瑞月)

(14) だって何があるかわかんないし、安定を求めちゃうかな。(瑞月)

(15) やっぱり語学力を生かせるところに行きたいかな。(理香)

この映画では「かな」は男性に比べ女性の使用が比較的多い。これらの中には、単なる不確かなことに対する疑問形としてではなく、(14)(15)のように、自分の意志や希望などをいうときに、断定せず不確かなことのようにいう、いわば婉曲話法ともいえる例が目立つ。これらは厳密には「かしら」の置き換えとはいえないが、実は女性の「かな」8例中4例はこういうものである。就職に際して自分が置かれた状況への不安がこのような言い方をさせているのだろうか。話者のキャラクターが反映している可能性もあるが、女性は2人が、このような言い方をするのに対し、男性には現れない。「かしら」でなく「かな」を使って疑問をあらわすという点では男性と差がないが、「かな」に男性とは違った意味をこめた用い方もするというのは、いわば「かな」の用法の拡大ともいえる。これは興味深いことである。

以上から、女性専用とされた文末形式については、「わ」「かしら」の不使用、「だ」「の(?)」については男女ともに使用するという形で中性化しているが、「ね」や「かな」などの使い方については、絶対的な性差とはいえないものの、一部男女によって使用傾向に差があることがわかる。

5.2 男性専用とされる文末助詞

この映画には比較的数字は少ないものの、従来男性専用とされた文末助詞も現れている。「ぜ」(光太郎に2例)、「ぞ」(光太郎に2例)、「かよ」(光太郎1例、拓人3例)と合計8例、他に(19)(20)のような「な」(光太郎14例、拓人3例、沢渡1例)が18例ある。

(16) 理香ちゃんウェブテスト受かんなくてたいへんらしいぜ。(光太郎)

(17) あれ？ 酒がないぞ。(光太郎)

(18) つか、お前、家で髪染めるって、高校生かよ。(拓人)

(19) まあ、もちろん嘘ってばれたらおしまいけどな。(拓人)

(20) でも俺バンドしかしてこなかったしな。(光太郎)

これらのうち「ぜ」「ぞ」「かよ」については、(17)の「ぞ」1例が男女5人で酒を飲んでいる場で、ふざけたような口調で発話されたものだが、他の7例は、いずれも光太郎と拓人2人だけの会話の中に現れ、女性や先輩に対して発話されることはない。女性の発話の中にも現れない。

文末助詞「な」は女性形としては「わ」に置換される「見たかったな」「すごいな」や、先の(12)～(15)のような「かな」の一部としては男女にとともに使用されている。(19)(20)は中性化した場合には「ね」となるようなもので、これらは18例すべて男性の発話である。ただ相手については男どうし2人だけでとは限らず、女性も同席している会話の中でも使われている。

6. その他の言語形式や話体の「中性化」「非中性化」

6.1 丁寧体発話の様相

佐竹(2016)では『日常』の談話を分析し、敬体(丁寧体)・常体(普通体)の使い分け要因を上下関係のある場面、対顧客場面、その他とした。年齢や職場での地位の上下、先輩・後輩などの要素が、下から上の者に対する丁寧体の使用を決めるということは、先に『ハッピーフライト』でも述べた通り、映画でも明確にみられることである。

『何者』では同学年同年齢の拓人、光太郎、瑞月、理香、隆良の間では普通体基調の会話が行われるが、拓人、光太郎から沢渡先輩に対しては丁寧体基調である。またバイトの同僚である後輩女子学生も沢渡、拓人、それに2人の知り合いで初対面(バンドのファンだったがことばを交わすのは初めて)の光太郎に対して丁寧体を用いる。

(21) 拓人：へーっ、先輩、忙しいっすね。

沢渡：うん。また帰れない日が続くよ。

拓人：あー、大変だな。

沢渡：お前、思ってねえだろ。

拓人：【沢渡、カップ麺を出す】あ、すいません。あざっす。

沢渡：何 書いてんの？

拓人：ああ、エントリーシートです。

沢渡：書きなれてんだろ、んなの。どんなこと書いてんの？見せろよ。

拓人：それはマジ、ちょっと勘弁してください。

(22) 後輩女子学生：なんでしたっけ？ 前に誘ってくれた劇のタイトル。

沢渡：『彼女の瞳に映る紫色を我々の多くは知らない』。

後輩女子学生：チョーかっこいいすよね。メッチャ泣けそう。誰が考えたんですか？ その話、センスやばいっすよね。

(23) 後輩女子学生：バンドずっと続けるんですか？

光太郎：あ、もうね引退したんだよ。あの、就職が決まって、帝国出版に。

後輩女子学生：マジっすか。チョー有名なとこじゃないすか。

これらの例には「忙しいっす」「かっこいいす」のような「で」が脱落した「(っ)す」が、男性にも女性にも使われている。また、(21)の拓人には「ありがとうございます」の省略形「あざっす」、「マジ」、(22)(23)の女子大学生(同一人)にも「チョー」「メッチャ」「やばい」「マジ」など現代の若者がよく使うとされる言い方が現れる。これらは同じ大学のサークルやバイトの親しい先輩に対する口調であり、同じ丁寧体基調の会話といっても、面接やグループ・ディスカッションなどの場面では、このような言い方はされない。

なお、丁寧体発話では一般的に男女の差は小さいとされるが、これらの、親しい先輩に対する省略形や若者ことばを含んだ丁寧体基調の発話でも、これらの語彙の使用も含めて男女差というほどのものはみられない。

6.2 若者ことばや音の変化など

前項でみた通り、『何者』には「(っ)す」「マジ」「やば(い)・やべ(え)」「メッチャ」「チョー」が男女どちらにも現れる。その出現状況は次の

ようなものである（()内は発話者）。

「(っ)す」23例（拓人11[んす1例を含む]、光太郎5[っしょ・んす各1例を含む]、隆良1[んす]、女子学生6）

「やば(い)」8例（拓人1[やべー]、光太郎6[やべー1例を含む]、女子学生1）

「マジ」6例（拓人2、光太郎3、女子学生1）

「メッチャ」4例（女子学生3、光太郎1）

「チョー」2例（女子学生）

他に、男性だけが発話しているものとして、「すげー〈すごい〉」「ねー〈ない〉」「うるせー〈うるさい〉」「わりー〈悪い〉」などのように「oi」「ai」「ui」が「ē」「ī」と長音化する言い方や、おもに文頭にきて間投詞的に用いられる「つか」（「というか」の短縮形）などがみられる。

これらの出現状況は次の通りである。

「すげー」8例（光太郎7、拓人1）

「ねー」17例（光太郎12、拓人3、沢渡2）

「うるせー」1例（拓人）「わりー」1例（沢渡）

「でけー〈でかい〉」1例（拓人）「やべー〈やばい〉」2例（拓人、光太郎）

「つか」12例（拓人4、光太郎8）

「つー〈という〉」3例（拓人1、光太郎2）

これらは『日常』ではどのような現れ方をしているだろうか。

「(っ)す・んす」117例（女性16例9人：20代1人 30代4人 40代3人 50代1人、男性101例22人：20代6人 30代10人 40代2人 50代2人 60代1人 70代1人）

「やば(い)・やべ」23例（女性10例9人：20代6人 30代2人 40代1人、男性13例9人：20代6人 30代2人 40代1人）

「マジ」20例（女性7例7人：20代5人 30代1人 40代1人、男性13例5人：20代4人 30代1人）

「メッチャ」29例（女性23例12人：10代1人 20代9人 30代1人 50代1人、男性6例3人：20代3人）

「チョー」33例（女性23例13人：10代2人 20代8人 30代1人 50代1人 60代1人、男性10例7人：20代2人 30代3人 40代2人）
「すげー」5例（男性のみ5人：20代3人 40代1人 70代1人）
「ねー」49例（男性47例26人：10代1人 20代6人 30代3人 40代4人 50代2人 60代3人 70代6人 80代1人、女性2例1人：30代1人—男性発話の引用として「○○は女じゃねーって言ったらしい」のように使われている）

文頭の「つか」は使用例がない。「つー〈という〉」は60代男性に2例のみみられた。また、『何者』にみられた「うるせー」「わりー」「でけー」については1例もなく、「やべー」は20代男性に1例のみ。ほかに「やべ」と長音化しないものが20代男性に2例あった。『日常』では「ねー〈ない〉」を除いて、このような音変化の例は比較的少ないようだ。

『日常』の総発話数は27197、談話の参加者は女性87人、男性61人である。『何者』の824発話、男4人、女3人中の数と単純に比較することはできないが、それでも使われ方の大まかな傾向はみることができるだろう。

「(っ)す)」は『何者』で女性1人だけに現れたのと同じく、16例9人と限られた数ではあるが『日常』でも確かに使う女性が存在する。

『日常』には「やば(い)/やべ」「マジ」「メッチャ」「チョー」なども男女ともに現れている。「やばい」「マジ」は男女ともに、20代～40代に使われているが、「メッチャ」と「チョー」は男性よりもむしろ女性によく使われている。特に20代以下では談話参加者10代3人、20代19人と、総数の半分近くに使用例があり、3人の女性のうち1人にしか現れないという『何者』の使用状況は、現実よりは少し遅れているとみるべきかもしれない。多少の劇的な誇張はあるにしても、これらのいわゆる若者ことばを連発する『何者』の女子学生は決して特異なキャラクターとして設定されているわけではなく、実際にいそうな学生として現実を反映したことばづかいをしているのである。

一方「すげー」や「ねー〈ない〉」が、女性には引用以外には現れず、男性のみの使用であるという点は『日常』も『何者』も共通している。これは映画の中だけの現象ではなく、自然談話を反映しているといえるだろう。

6.3 人の呼び方

『何者』における人の呼び方には明確な男女差がある。まず彼らどうしの談話の自称は、女性は「わたし」「あたし」、男性は「おれ」に限られている。ただし、どちらも面接などの場面では「わたし」になり男女差はない。

人を指す場合、同年齢の同性どうしは「瑞月」「拓人」のように呼び捨て、女性から男性に対しては「拓人君」「光太郎君」とクンをつけ、拓人は女性には「瑞月さん」「理香さん」のようにサンをつける。瑞月と光太郎の場合には以前つきあっていたことから、互いに「光太郎」「瑞月」と呼び捨てにする。理香も隆良を、「隆良」と呼び捨てにしている。また、光太郎は理香に対しては初対面から「理香ちゃん」とチャンづけで呼ぶ。これらは原則として本人が目の前にいてもいなくても変わらない。先輩に対しては「先輩」などと呼ぶか「沢渡さん」「拓人さん」のようにサンづけにする。光太郎は、同学年だが就活では自分より経験のある拓人を、ふざけて「先輩」「師匠」などと呼ぶこともある。理香へのチャン付けも合わせ、このような呼び方は、光太郎の対人関係における融通無碍な態度を示すものとして描かれているようだ。

対称代名詞は、男性では「お前」が同輩・後輩の男性に対して多用されている。ただしこの映画では女性に向かって用いられた例はない。男女とも原則的に異性の相手には対称代名詞を使わないのであるが、ただ、瑞月が隆良を批判する場面、理香が拓人を非難する場面で、それぞれ「あなた」「あんた」を使っているのが注目される。「あなた」や「あんた」は他からとりたてて相手を区別するという点において、「名前（君）^{ツン}」よりは明らかに強い。

小林（2006）では、もともと書生など知識階層のホモソーシャルな会話では「僕」「君」と呼び合っていたが、戦争中の軍隊ことばの影響などを経て「おれ」「お前」が「ちゃう〈てしまう〉」「ねー〈ない〉」などとともに使われる会話が、戦後、学生や若者たちにも定着していったことを述べた。『何者』の「お前」が女性に対しては使われていないということは、5.2にあげた「ぜ」「かよ」などの男性文末形式の使用もあわせ、このようなことばの系譜をひいてみるとみることができるのではないだろうか。ちなみに『日常』でも「お前」の出現は8例に過ぎないが、そのうち7例が男性が使用し

たもの、さらにそのうちの5例は若い男性が友人を呼んだものである（20代女性の1例は同輩の男性を呼び、家族への呼びかけは弟から姉へ1例、夫から妻へ1例である）。これらの結果からは、呼称に関しては自然談話より映画のほうが大きな男女差を残している（中性化していない）といえそうだ。

7. まとめ

『何者』では女性によるいわゆる女性文末助詞の使用は「の」系列を除いてはすでに皆無で、男性と同じく「だ」使用形式が普通になっている。「の」系列に関してはむしろ男性の側からの使用によって中性化している。一方、男性によるふざけた女性形使用や、また男性文末詞「ぜ」「ぞ」「かよ」「な」などが男性のみに用いられているところからは、男性の中に男性形式への拘りや、男性どうしの共感意識があるのかもしれないことが察せられる。

文末形式以外では丁寧体・普通体の使い分け、会話にしばしば混じる若者ことばなどはほとんど男女に差なく使われているが、「すげー」「ねー」のような音の変化、また人を指すことばなどには、ここでも男性のみが使う言い方があって、中性化しているとはいえない部分もある。ただし、中性化している部分、していない部分を含め、そのほとんどは『日常』の自然談話でも同じような傾向を示している。その意味で『何者』の若者たちは、実際の同年代の若者たちの話しことばを反映したしゃべり方をしているといえよう。

引用映画作品

『ハッピーフライト』2008 日本 103分 監督：矢口史靖

『海街ダイアリー』2016 日本 127分 監督：是枝裕和

『家族はつらいよ』2016 日本 108分 監督：山田洋次

『何者』2016 日本 98分 監督：三浦大輔

参考文献

朝井リョウ（2012）『何者』新潮社（第148回直木賞受賞小説）

遠藤織枝・小林美恵子・佐竹久仁子・高橋美奈子編（2016）『談話資料 日常生活のことば』 ひつじ書房

- 尾崎喜光 (1997 (2011)) 「女性専用形式の今」現代日本語研究会編『合本女性のことは・男性のことは (職場編)』 pp. 33-58 ひつじ書房
- 尾崎喜光 (2004) 「日本語の男女差の現状と評価意識」『日本語学』23-7 pp. 48-55 明治書院
- 現代日本語研究会編 (1997・2002 (2011)) 『合本女性のことは・男性のことは (職場編)』 ひつじ書房
- 小林美恵子 (1995) 「文末形式にみる高校生の会話管理」『ことは』16 pp. 35-51 現代日本語研究会
- 小林美恵子 (2006) 「「おれ」と「おまえ」の共同体 ―その変貌と拡大―」『ことは』27 pp. 90-110 現代日本語研究会
- 小林美恵子 (2010) 「1960年代～現代の映画にみる妻の「美しい」日本語」『ことは』31 pp. 51-88 現代日本語研究会
- 小林美恵子 (2017) 「『日常生活』の呼称」『ことは』37 pp. 14-32 現代日本語研究会
- 佐竹久仁子 (2016) 「日常談話に見られる敬語使用の実態」遠藤他編『談話資料 日常生活のことは』 pp. 191-214 ひつじ書房
- 増田祥子 (2016) 「女性文末形式の使用の現在―『女性のことは・職場編』と比較して」遠藤他編『談話資料 日常生活のことは』 pp. 131-154 ひつじ書房
- 水本光美 (2005) 「テレビドラマにおける女性言葉とジェンダーフィルター―文末詞 (終助詞) 使用実態調査の中間報告より―」『日本語とジェンダー』5 pp. 23-46 日本語ジェンダー学会
- 水本光美 (2006) 「テレビドラマと実社会における女性文末詞 使用のずれに見るジェンダーフィルタ」日本語ジェンダー学会編『日本語とジェンダー』 pp. 73-94 ひつじ書房
- 水本光美・福盛寿賀子・福田あゆみ・高田恭子 (2006) 「ドラマに見る女ことは「女性文末詞」―実際の会話と比較して―」『北九州市立大学国際論集』4 pp. 51-70 北九州市立大学国際教育交流センター
- 水本光美・福盛壽賀子・高田恭子 (2008) 「ドラマに使われる女性文末詞―脚本家の意識調査より」『日本語とジェンダー』8 日本語ジェンダー学会 https://gender.jp/journal/backnumber/no8_contents/mizumoto/ (2019年8月閲覧)

(こばやし みえこ：早稲田大学)

(2019.11.18 受理)